

昭和女子大学 内部質保証推進本部外部評価委員会 報告書

日時：2021年7月12日（月）13:05～15:00

場所：昭和女子大学 学園本部館3階中会議室

出席者：【学外】（敬称略、五十音順）

朝比奈豊 毎日新聞グループホールディングス相談役

岩本康 世田谷区副区長

宮崎知子 株式会社陣屋 代表取締役 女将 ※オンライン出席

茂呂真理子 株式会社日能研 常務取締役 ※オンライン出席

野吾教行 学校法人河合塾教育研究開発本部教育研究開発部

渡辺修 石油資源開発株式会社 代表取締役会長

【学内】

坂東眞理子理事長・総長、小原奈津子学長、吉田昌志副学長、

井原奉明内部質保証推進本部本部長、石垣理子内部質保証推進本部委員、

緩利誠内部質保証推進本部委員、吉田奈央子内部質保証推進本部委員、

上田友記子内部質保証推進本部委員、中島さやか内部質保証推進本部委員、

阿見寺内部質保証推進本部委員、下村良幸内部質保証推進本部委員

欠席者：【学内】

清水史子内部質保証推進本部委員

開会に先立ち、坂東理事長・総長から開会の挨拶があり、本委員会の目的について説明があった。続いて、井原内部質保証推進本部長から本委員会の趣旨説明、学内の出席者および外部評価委員の紹介があった。

その後、「2020年度自己点検・評価報告書」の中から、2020年度の重点事項を中心に説明があり、外部評価委員会から評価・提言をいただいた。

報告（1）2020年度トピックス（緩利内部質保証推進本部委員）

○創立100周年記念事業

[説明]

昭和女子大学は2020年に創立100周年の節目の年を迎え、「創立100周年記念事業」と

して大学の理念・目的に沿った取り組みを数多く企画したが、新型コロナウイルスの感染拡大状況により、実施できたもの、オンライン実施に変更したもの、残念ながら延期を余儀なくされたものなど、多くの影響を受けた。

また、「世界とつながる」「社会とつながる」「未来とつながる」をキーワードに掲げ、産学官連携プロジェクト、女性活躍支援、生涯学習、リカレント教育、社会的支援という形で、社会とのつながりを重要と捉え、学生の成長を支えるのみならず地域に貢献する姿勢を打ち出し、社会人への教育機会の提供にも力を入れている。

○教育研究組織の改革

[説明]

昭和女子大学では、現代社会の変化に即した教育研究組織の見直しや改善を行っており、2020年度は生活科学部から環境デザイン学科を分離独立し「環境デザイン学部」を設置、また、生活科学部は「食健康科学部」へ名称変更を行った。

大学院の生活機構研究科では、実務経験がある社会人向けに、働きながら1年間で修士号を取得することが可能な1年制コースを2021年4月に開設、福祉社会研究専攻の同コースに43名の大学院生が入学した。今後も社会的ニーズに対応できるよう教育研究組織のさらなる充実、改善に努めたい。

報告（2）コロナ禍の本学の対応（井原内部質保証推進本部長）

本年度の外部評価委員会では、2020年度自己点検・評価報告書の中から、特にコロナ禍で本学がどのように教育活動を行ってきたのか、様々な課題に対しどのように対応したのかについて重点的に説明を行い、外部評価委員から評価・提言をいただいた。

○コロナ禍の教育活動とFD

[説明]

2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大と緊急事態宣言の発令により、4月24日から3種類の形態によるオンライン授業を実施した。学生に向けては、坂東理事長・総長、小原学長から「今だからできること」というメッセージを発信し、オンライン授業、オンライン教育を進めていくという大学の姿勢を示した。

2020年後期には、一部の授業で対面を再開し、授業ごとに教育効果が高い実施方法で対

面とオンラインを使い分け対応した。また、対面で受講する学生と在宅で受講する学生、両方に同時に授業を行う「ハイフレックス型」の授業も取り入れ、オンライン配信可能な教室環境の整備にも注力した。

オンライン授業を推進するにあたり、教員の技術習得・向上のため、FD (Faculty Development) 活動を通じて、オンライン授業に関する様々な教育方法の研修を実施した。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、従来の授業方法とオンライン授業での教育効果・学習成果の違いや、直接対面での指導や交流が行えない学生への対応・支援体制について質問があり、実施した取り組み、オンラインの効果と課題について意見交換を行った。

〇コロナ禍の留学

[説明]

コロナ禍で海外渡航が制限される中、昭和女子大学では、昭和ボストン及び隣接するテンプル大学ジャパンキャンパス（以下、TUJ）との連携体制という強みを最大限に利用することができた。昭和ボストンや海外協定校からはオンラインによる留学プログラムが提供され、580名の学生が参加した。また、TUJとの連携ではダブルディグリー・プログラム等の授業履修に加え、シンポジウムやイベントの共同開催を通じて、様々な文化を背景にもつ学生との交流・協働の中で相互理解を深める環境を提供することができた。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、ダブルディグリー・プログラムにおける他大学科目と自大学のディプロマ・ポリシーとの紐づけについて質問があった。

〇コロナ禍の地域連携・プロジェクト教育

[説明]

コロナ禍により地域と共同で開催するイベントは中止・延期を余儀なくされたが、地域・組織・企業との連携、プロジェクト活動はオンラインを利用しながら幅広く活動している。また、前年度のプロジェクトに参加した学生が後輩を指導する Student Advisor 制度を設けて、ピアラーニング、学生相互での交流を通じ、質の向上と学生の成長を図る取り組み

も実施している。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、コロナ禍により地域貢献活動の減少について懸念する意見があった。また、地域住民・組織との連携・協働は学生にとって教育効果が高い一方で、連携先の疲弊とならないよう、相互に良い効果をもたらす活動となることが望まれるとの意見があった。

○コロナ禍の入試

[説明]

一般入試以外の入試については、一部をオンライン面接へ切り替え、試験会場で面接を実施する場合には十分に感染症対策を講じて実施にあたった。大学院入試では、筆記試験の一部をオンラインで実施した。学部的一般入試に関しては、感染症対策を講じながら教室内の受験生の人数を制限する形で、通常どおり会場で実施した。

オープンキャンパスは、前期はオンラインで受験相談会や説明会で実施、12月以降は学部学科ごとに日程を分け事前予約制の来場型オープンキャンパスを開催した。また、地方に在住する受験生向けには、ホームページ上に大学・学科紹介や学生生活を視聴・体験できるコンテンツを作成し「バーチャルオープンキャンパス」として公開した。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、コロナ禍で入試の方法も変更が余儀なくされるなか、アドミッションポリシーに基づいた受験生の選抜に関する意見があった。

○コロナ禍の学生支援

[説明]

新入生向けの支援では、入学時からコロナ禍で登校する機会がない状況の中で学生が孤立することがないように、オンラインでの上級生との懇談会、新入生との交流会を実施し、緊急事態宣言解除後には希望者を対象に対面での交流機会を設けて、精神的なサポートに注力した。カウンセラーが学生のような相談に応じる学生相談室では、電話やZoomでの相談支援を実施した。

毎年 11 月に開催する「秋桜祭」は、来場形式での実施はできなかったが、学生主体でオンラインでの実施を成功させた。

経済的な支援策では、従来の支援に加えて学習環境奨励金、経済的支援奨学金、授業料特別減免制度などコロナ禍の非常時に対応するための対策を講じ、経済的に困窮する学生が学びを止めることがないように支援を継続している。

就職支援・キャリア支援では、5月に「コロナ非常時の就活」シンポジウムを開催、オンライン個別面談を開始し、コロナ禍でも学生が不利なく就職活動に取り組むことができるように支援を実施した。また、学生が希望するメンターと個別に相談することができる社会人メンター制度も継続して実施している。インターンシップは、コロナ禍により学生の受入を辞退する企業がある一方で、受入可能企業には人数の増員を依頼し受入先の確保に努めた。学生数 1000 人を超える規模の女子大学の中で、10 年連続実就職率 1 位を達成し、実就職率が 97.0 パーセントとなった。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、学生支援の取り組みについて、対面で交流する機会が減少し大学生活に意義を見出せなくなっている学生の存在をあげ、オンラインツールを利用した学生間の交流の機会を設けるなど学生生活が有意義なものとなるよう支援をしてほしいとの要望があった。就職支援・キャリア支援の取り組みについては、支援の成果が高い実就職率に表れているとの評価があった。また、就職活動においてオンライン化が急速に進む中で、就職先を決定する前に一度は職場訪問し、現場やそこで働く人を見るよう指導して欲しいとの意見があった。

講評（まとめ）

・ 渡辺外部評価委員

コロナ禍の非常に難しい状況のなか、坂東理事長・総長、小原学長、マネジメントサイドの皆さんが、工夫されて対応に当たられていることが良く分かり、頼もしく感じた。それぞれの基準に従って着実にやってらっしゃることは評価できる。そのうえで、2020 年度自己点検・評価報告書について一言申し上げたい。それぞれの基準に対し、よく工夫されていると感じたが、世の中に強く訴える部分に欠けている印象がある。全体を通じて思い切った PR をしても良いのではないかと。例えば、テンプレ大学ジャパンキャンパスとの共同

キャンパスについて、報告書には2021年度以降もしっかり活用していくとの記載があるが、さらに具体的にアイデアを盛り込み、グローバルな目標を掲げて着実にやっていくという姿勢を強調すると良いのではないかと。共同キャンパスは昭和女子大学の財産であり、全体を通じてPRするコーナーストーンにもなり得る。

・朝比奈外部評価委員

2020年度自己点検・評価報告書から、厳しい中でもここまでやっているという着実な姿勢が読み取れた。かつての良妻賢母を目指す大学から、社会に出て様々な分野で活躍するリーダーとなる人材を育てたいという大きな教育目標を掲げて、その取り組みが年々実現していることが窺えた。既に自己点検・評価についてはよく対応されているので、そこは今後もしっかりやっていただきたい。さらに、長年、ジャーナリズムの仕事に携わった経験から申し上げますと、もっといろいろなことがやれる余地、可能性が昭和女子大学にはあるのではないかと考えている。今はコロナであったり、オリンピックであったり、目の前のことに対していろいろやっているが、これらはやがて終わる時がくる。大きな社会の仕組み、生活の変化があって、オンライン重視、ニューノーマルが定着していくだろうが、コロナが去ってもコロナ前にあった問題、日本の置かれた状況は変わらず、少子高齢化、人口の減少という問題を抱えている。これに対し、元気な高齢者と社会との結びつきや、日本で働く外国人の活躍が大きなポイントとなり、この点において昭和女子大学は非常に良い立ち位置にいると考えることができる。オンラインで外国との交流もあり、対面ではテンプル大学との交流もある。また、これから大学でいろいろ学びたいという高齢者が増えることが予想される中で、大学発信のリベラルアーツ、教養教育を行なうための技術の蓄積や可能性が大学には多くある。学びたい人たちのニーズに応えていけば、昭和女子大学は非常に面白そうだと、大学に入る人たちが増えるのではないかと。

コロナ禍の話でいえば、人々が家で食事をするようになって「健康と食事」への関心が高まっている。その中で「食健康科学部」ができたというのは、時代の流れを読んでいるようで非常に期待できる。留学についても、ポストコロナをチャンスと捉え、海外との行き来が再開できれば、例えば発展途上国からの留学生を受け入れて、女性リーダーを育てようという大学の理念やノウハウを生かした教育ができるのではないかと。全世界相手にやれることがたくさんある。期待をこめて、可能性のある大学だと思っている。

・岩本外部評価委員

初めて参加させていただいた。昭和女子大学の学生とは、世田谷区は接する頻度が高いという印象があったが、今回あらためて大学の取り組みを伺い、「世の光となろう」という教育理念や行動指針で「社会とつながる」ということをちゃんと位置付けたうえで、社会貢献、地域連携をされているのだと理解できた。本日はコロナ禍での対応の説明が中心だったが、区役所もDX推進で変わらなければいけない面もある一方で、社会貢献などはリアルに人と出会うことから始まるという面がある。コロナ禍で縮小した活動が学生生活にどのような影響があるのか懸念もしている。今年か来年、再来年、だんだん評価も定まってくるかと思うが、そういったところも、今後評価として見ていただきたい。

・野吾外部評価委員

本日の活動内容に関する報告、そして事前に配布された報告書を拝見し、コロナ禍という非常に大きな障壁がある中で改革を進められてきたのだなということがよく分かった。報告書では、内部質保証の仕組みづくりが課題として挙げられており、早急に取り組まれるべき課題であると感じている。具体的には、内部質保証の中でも特に教育に関するものとして、三つのポリシーをどう達成できているのかというのをしっかり確認できる仕組みづくりが必要である。その第一歩としては、アセスメントポリシーをしっかりと固めること。どういった指標により何を利用して確認するのか。例えば、本日の委員会もその一つの形態になると思う。どこがしっかり分析して、それをどこにフィードバックするのか。引き続きコロナ禍による対応は続いていくと思うが、内部質保証の組織体制づくりという課題についても改革を進めていただきたい。

・茂呂外部評価委員

主体性を持って挑戦されている一つ一つの取り組みが、昭和女子大学の教育目標にしっかりと繋がり根付いた活動、取り組みだと感じた。

コロナが収束した後も、恐らく正解がない世の中になっていくという事は今後も変わらないだろう。その中で、女性が一人の道をきちんと歩いていくというのは、非常に重要なことである。その一つのキーとして、とても素晴らしく先進的な取り組みだと感じたものが、大学院を1年間で履修できる制度があることである。人生100年時代といわれている中で、日本社会の問題として社会人の学び直しができている、世界各国と比較して見ても日本

の大学院進学率は非常に低い状態にある。これは日本が抱えている課題とも言える。キャリアを積んで、10年後、20年後、また学んでセカンドキャリア、そして、いずれはパラレルキャリアをきちんと自分で作っていくというのは、これから日本社会において非常に重要なことであり、昭和女子大学の大学院の取り組みは日本の社会においても貢献度が高いものなのではないかと感じた。一方で、大学院の充足率などを見るとまだ課題があるように推察される。大学院1年制コース制度があることが、社会に出て活躍している社会人により浸透していくと良いのではないかと感じた。

・宮崎外部評価委員

本日の説明を伺い、社会全体がコロナ禍で様々な対応に迫られるなか、大学もその変化に柔軟に対応されているということが強く印象に残った。卒業生の立場で一言申し上げると、コロナ禍でも感じたことだが、社会に出ると良くも悪くも精神的に強いことは何事にも勝ると感じている。未曾有の出来事によって急変する社会状況下で、自立しているということ、自分に対してしっかり芯を持っているということがとても重要である。そして、社会に出る前、教員や周囲の人々との関わりの中で切磋琢磨しフォローし合える最後のチャンスが学生時代だと思うので、大学は高等教育や研究が主要な目的ではあるが、精神面での成長を促しフォローするような取り組みがあれば、社会に出ても活躍しやすいのではないかと感じる。周囲の卒業生を見ていると、意外と自由に、ユニークに生きている方が多く、変化にも柔軟に対応し、制限のある中でどれだけ自分の個性を出してポジティブに楽しめるか、そういう環境を自分の周りに整えることが上手な卒業生が多い印象がある。そういう要素を育む環境が大学にあることは良いことなので、様々な取り組みを通じて良い面を引き続き伸ばしていただきたい。また、大学院を1年間で履修できるというのは大きな特徴である。これからの社会情勢として週休3日や副業可能な働き方というのが推進されていく可能性があり、社会人の学び直しを広く提供できることは先進的な取り組みであり、より一層アピールになるのではないかと感じる。

以上の講評の後、小原学長から外部評価委員からの提言、評価に対する謝辞と、今後新しいことに挑戦し改革しながら、創立の精神を受け継いで昭和女子大学を発展させていきたいとの発言があり、閉会となった。

以上